2）氷河情報センターニュースの編集・発行
3）ミニシンポジウム（分科会セッション）企画・開催
4）氷河情報センター HP の更新
4. 2011 年度予算案の承認
5. その他
1）センター活動支援基金の事業実施状況について
2）雪氷辞典の改訂について
3）氷河情報センター HP 更新の紹介

（国立極地研究所　中澤文男，名古屋大学大学院環境学研究科　岡本祥子）

（2011 年 10 月 11 日受付）

2011 年度　凍土分科会報告

雪氷研究大会（2011・長岡）において凍土分科会セッションおよび総会をおこなった．参加者は 16 名であった．

日　時：平成 23 年 9 月 20 日（木）17：30-19：30
場　所：ハイブ長岡　会議室 D, E
講演会「凍土が語る気候変動」（17：30-19：00）

科学的な凍上観測が始まって以来数 10 年．諸先輩たちが積み上げてきた観測結果から最新の観測・解析結果までをすりあわせ，気候変動を考える．武田分科会長（帯広畜産大）より講演会の趣旨説明に続き，以下 3 つの講演があった．海洋開発研究機構の斉藤和之氏から「全球気候モデルの気候再現性と凍土過程」と題し，数値モデルの可能性と制限について，水平解像度の現状やダウンスケーリングのアイデアなど具体的紹介がなされた．そして，観測と連携を取ったモデル化の重要性の観点から，日本の地温データや凍結深のアーカイブの必要性が提議された．北海道大学の岩花剛氏からは「富士山の永久凍土研究速報」と題し，冬期の激しい冷却・遅い融雪・多い降水量といった富士山の凍土環境の特徴と，この 3 年間の観測結果から富士山に永久凍土がある/あった可能性について報告された．寒地土木研究所の原田裕介氏からは「積雪下での土壌凍結融解の長期変動」と題し，帯広における 30 年間の観測データと解析結果が報告され，凍土の消失日の予測法の提案があった．また，武田分科会長からは，土壌凍結（深）研究の今後の展開や周辺分野とのリンクの取り方を考える一例とし年輪と凍結深の関係について話題提供があった．

分科会総会（19：00-19：30）

本年は役員改選の年にあたり，次期分科会会長に武田会員，幹事に渡辺会員，監事に伊豆田会員が選出された（いずれも再任）．昨年度の活動報告として，大学間交流セミナーの後援，北十勝 GEO ツアーの協力，第 11 回「永久凍土のモニタリングと変動に関する研究集会」の後援，分科会メーリングリスト・HP の維持が紹介され，H22 年度の監査報告が示された．また，昨年の計画にあった北海道凍結深分布プロジェクトの現状，雪氷用語辞典の改訂についての現状説明と作業依頼，今後の予定が報告された．本年度の活動計画については，各集会，セミナー，ツアーの後援の継続，日本の地温データセットの収集についての議論の継続が上げられた．また，関連国際会議（TICOP, AGU, 土壌水分ワークショップなど）や Vadose Zone Journal の凍土特集号の紹介がなされた．

（凍土分科会幹事　渡辺晋生）

（2011 年 10 月 3 日受付）